

H9.8.30(土)
H6.7.14(木)
T

百科11-236
11月14日 372
5906

9月20日 奈良教王山院(9月)
5917
5931
11月14日 372
346

5,915

8月15日 大正12年 327
百科11-236
11月14日 372
5917
5931
11月14日 372
346

延元元年 5925
日本史 372
5917
5931
11月14日 372
346

5894
光明天皇 日本史 345

北朝第二代光明天皇

延元元年(一三三六)正月、尊氏が入京した

時、後醍醐天皇は比叡山に難をさけ、いった

ん、尊氏を西走させることができた。

一、か、尊氏はただちに舞い戻り、入洛。五

月に、後醍醐天皇は再度比叡山へお遷りになった

楠木・千種・名和などたのみとする武力を

無くした後醍醐天皇は、一、尊氏が八月十五

日北朝第二代の光明天皇を奉じたことによっ

て、実質上、皇位を失った事態におちいっ

てしまった。御所

十月、花山院に幽閉中の後醍醐天皇から、

光明天皇へと神器が授けられた。(も、とも

このうち南朝は、二水を偽器とした。)

十二月、後醍醐天皇は神器を持って、幽閉

所の花山院御所から吉野へと走り、朝廷を再

建された。

こうして二に、

5894
右が2行

5.916^p

1392 かのつみへ 57年向(昔のあえろ)
- 1336 室町幕府 皇室大百科 254^p
足利57^p 5761^p 「日本史」 高校 188^p
太平記 - 361^p ⑤5906^p

吉野の朝廷、日南朝
京都の朝廷、日北朝
という二つの朝廷が併存するようになった。
そしてこれより以降、南北朝の統一(一三
九二)までの五六年間、天下が二分されて
対立する。いわゆる二朝の時代が続き、
ゆくゆくは後醍醐天皇へ光明天皇へ他参照)
(「日本史辞典」東京創元)

*

懐良親王の西下

政治の政權へ一三三四一三三六へは、わすか

こ
こ
に
後醍醐天皇は、
勢力を盛りかえそう

と苦慮して皇子たちを諸方へつかわし、その

挽回を策した
九州には、
征西將軍として懷

良親王（一三二九）
一三八三）
か派遣さる

ニ
と
に
た
う
た
。

延元元年（一三三六）九月も末の頃、紀伊

その間道を少年を交えた十四、五名の一行が急

足で旅する姿が見られた。
この一行こそ、

南朝の再興を計る為
比叡山から九州へ向かう

懷良親王（当時八歳）とその従者達であった。

同
年
十
二
月
三
十
日
付
で
阿
蘇
宮
司
惟
時
に
令
旨

を出したその中に、
「讚岐到着」とある。

そののち懷良親王らは、
宮方である伊予の忽

那島に居を移し
ここに三年余の月日を送る

ok

第 572 回 比叡山 参照

・カラー
・空がまばら
になっている。
・きれいな
空色に
おいて下り。

・右頁の
上半分に
左右を大きく
はみだして
掲載下り。

5,918^P



1424 第572図 比叡山延暦寺

1324

1224

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠 帝国書院 平成24年7月12日発行 93頁参照

・延暦寺とは、東塔・西塔・横川の三地域からなる比叡山全体をさす。山中には、数百の堂宇(建物)がある。

582^P

H9.8.30(土)
→H6.7.15(金)

人名行149^p 懐良親王 百科⑥-148^p
菊池郡大-377^p 1087^p

5.919^p

地名年592^p
(セ、分) 懐良^{改訂} 102^p

な お、松山市西北方の海上に口忽那七島
と呼ばれる一連の島々がある。七島のうち中
島が最大で、此島を忽那島という。こゝもある
中島の東に睦月島。野忽那島があり、西に
怒和島・津和地島。二神島があり、二神島の
南にやや離れて由利島がある。
懐良親王の一行は、瀬戸内海の要路にあ
るこの忽那島の氏族、忽那義範をたよってや
つてきたのだった。忽那氏は、遠く藤原道長
を祖にいたadaki、皇室とも関連をもつていた
。ここにあれば、九州の情勢も、畿内の様子も
知るゝ把握でき、事態の推移によつては四国
の各方を糾合一京へ攻め入ることも可能で
ある。
■とはいへ、一行の行動はあくまで隠密のう
ちに行なわれ、当時者のほかは誰も知らない。
としてあった。(「懐良親王の生涯」坂井藤雄
葺書房、一〇一―一〇二頁。「帝国地名辞典
太田爲三郎、名著出版」へ忽那島参照)

神皇正統記 190^p

⑤ 5924^p

5,920^p

太平記③-373^p 神皇正統 190^p 192^p
北畠親房 536^p 5875^p 5939^p
北畠親房 536^p 5875^p 5939^p
北畠親房 536^p 5875^p 5939^p

北畠親房一 神皇正統記 山を著述

延元三年（一三三八）北畠親房等は

東国で勢力の回復をはかる爲 義良親王（後

の俊村上天皇）を奉じて吉野から伊勢へ出て

伊勢神宮に詣でた後 船出した。

五十二艘の大船団は、はじめはつつがなく

航海を続けていった。

ところが、遠州灘にさしかかったとき、大

きな暴風に出会ってしまった。日 神皇正統記

に九月十日頃とあるから、いまでいう台風だ

ったのであろう。

助かった船にても、ちりぢりに吹き流さ

れていった。

義良親王の乗った船は、あくる日、知多半

島沖の篠島にたどり着いた。

また、別の船にいた北畠親房は、遠い、東

国の常陸国（茨城県）に漂着した。（「神皇

正統記」後醍醐天皇の条、他参照）

※

2. 太平记 1483¹
 神皇正统 41 太平记 ③-396¹
 境界 → 林说 1687¹
 天

神皇正統記 川頁 5 行

みう
見受ける
云 2104

54147 云 1462
著本

H11.11.26
→ (2) 不_レ返す返す
どうなると

神皇正統記 99頁

5,923

異朝の一書の中、

「日本は吳の太伯が

神皇正統記 99頁

口料 596
太平記 3-396

ニくす
国料 云 776

*

も知れないか、定かならないことではある。
世間の人々を納得させようと務めたのか
ないふりをして、日本書紀の記述に従い、
いやは、あるいは、そのようなことなど知ら
ように見受けられる。

照

とある。「神皇正統記」へ「応神天皇系」参

といへり。返々あたためことなり

日本は、吳の太伯が後世と云ふ

異朝の一書の中に

解いていたことが分かる

ともあれ親房は、大略、日本書紀の記述に沿って理

ったようである。神皇正統記へ「神天皇系」参

と記されていいる。腹にすえかねること

て、中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。「世界大百科事典」平凡社へ「神皇正統記」参照

もつとも、国料(注)義の立場をとる親房にとつ

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

る。中国の書の中に「倭は吳の太伯の後世

どいでもない

$$\begin{array}{r} 1368 \\ 1339 \\ \hline 2957 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 1368 \\ 1339 \\ \hline 2957 \end{array}$$

在位 三三九一三六八

儀 511 P(礼式)

義正 181
587833

太平記3-374

5920°

後醍醐天皇薨去

遠州灘で大暴風

にあつた義良親王は、漂

着
川
左
知多半島沖の篠島から伊勢へとひき返

1、あくる年の延元四年（一三三九）三月、

ふたたび吉野へと帰られた。

ろーて五ヶ月後の八月十六日、義良親王は

おもいがけなく
父のきみ後醍醐天皇の
崩御

に付き赤ゆた。

そのより以前、義良親王には立場（立太子）

の儀
かきま
て
いた
の
で、
崩御
の前
日
(八月

十五日) 午に讓位がおこなわれ、即位は、後日

に約した。時に十二歳であつた。すなわち

南朝の後村上天皇(一三二八一三六八、在

位二九年)とは、このきみのことである。

後醍醐天皇は譲位されたこの日、つまり崩

御の前日（八月十五日）にさえ、西国伊予の

忽那島におうる懐良親王へ
もとどりの綸

二日
 小糸に紐書し、使者の賜書の中に隠して持たせた論二日
 を送

H6.7.16(土)⑤
→

北關 南1302-34
後漢の北宮の殿 5,925 P

③ 太平記 312 P
皇太極 254 P
丑の刻の皇太極 254 P
8月17日

おうたい (うたい とお)
太平記 3-375

下
夕

*

時に、五十二歳^{さいだ}であった。(「私本太平記」
吉川英治^{あきざり}へ秋霧^{きよぎり}の御記^{ぎよき}。他参照)

「わかなきのちも、朝敵^{あしたてき}掃滅^{そうめつ}のはかりをお
こたるな」
と激励^{げき}しておうたほどだ。あつたのに、御容^{ごよう}
体が急変^{きゅうへん}した。
■後醍醐天皇^{ごたいこてん}は、
「玉骨^{ぎよく}はたとえ南山^{なんざん}の苔^{こけ}に埋^{うめ}るとも、魂魄^{こんぱく}
は常に北關^{ほくかん}の天^{てん}を望^{のぞ}まんと思^{おも}う」
と、さいごの論言^{ろんごん}を残^{のこ}さず、左^{ひだり}の御手^{みで}に法華^{ほふけ}
経^{きやう}の第五卷^{だいごくわん}を持^もち、右^{みぎ}の御手^{みで}に御剣^{ごけん}を抱^だりて
八月十六日の深夜^{しんや}丑^{うし}の刻^{とき}、おかく小^こになつた

けいせい
形勢 617
様子 情勢

まんじゅう
饅頭 2100

武 元 1104
大軍に
氏の名となった。

改行 5926P

忽那島に3年 5917P
皇太弟 255 義良 1328~1368 5919P
管領 小村 735 義隆 1329~1383 5917P

後村上天皇の
254P

太陽を背にして
盟 延元五年（一三四〇）は、後村上天皇の
践祚によって、「興国」と改元された。
この年、後村上天皇は、先帝のご遺詔を諸
国へ告げ知らせになり、また一つ年下の懐良
親王を征西將軍とし、九州を管領させられた。
懐良親王が伊予の忽那島を出立されたのは
延元四年（一三三九）末とも、興国元年（一
三四〇）秋とも考えられている。（「懐良親
王の生涯」坂井藤雄、葦書房、一〇三頁。「菊
池氏三代」杉本尚雄、弘文館、一六四頁参照）
武家の地盤であった。先に足利尊氏が九州へ
落ちてきたのもそれであり、尊氏が東上して天下
を収めたのも、その支持する九州の勢力があ
ったからにすぎなかった。
九州北部に少武、東部に大友、西部に松浦
党、南部に島津・畠山という武家方があって
その形勢は、小さな館を囲む饅頭に似ていた。

毎日うるはし 38℃ 7月17日
 46.7.17(日) 改行 懐良親王 104 佐伯 6% 5,927^P
 5926 奥口元 648

名和長年 5907[?]

ることが出来る

山川出版社、九三、九七頁参照)
 だが懐良親王は、ただちに菊池・阿蘇・八代
 へ向かわれたわけではない。
 懐良親王は、途中、豊後国佐伯に一時上陸さ
 れたようである。(懐良親王の生涯、坂井藤雄、葦書房、二〇四頁参照)
 この年の十月十日、安芸の守護武田直信が
 忽ち那島を攻めた時、四国本土から土居通世が
 救援に赴いて撃退した。この情況が懐良親王
 のもとに十日余りで報せられ、二十一日付け
 でその戦勝を賞せられ、小ていする文遺により
 隠岐を脱出して伯耆国(鳥取県)へ行き、そ
 の地の豪族名和長年に迎えられた翌年、長年の子
 の義高が建武元年(一三三四)正月、八代桂
 の地頭に補せられ、以来、名和氏は八代を中
 心に菊池・阿蘇両代とともに武家方と戦って
 いたのだ。(「熊本県の歴史」森田誠一、

小林 1031
 モリ
 小林 2241
 年

のこす
 つかめ

こ

为寺力付 地8斤 1342.5 1342.5
 山(1) 1601P -1339米 -1340秋
 2 125 2年半 1年半

コクヨ ケー20 20×20

① 1336年苗5917
② 苗5930 12行

右頁の上半分、はみ出し
 大正647と同時表
 掲載下さい。(第19表と同一)

1509 第61表 初代天皇と懷良親王の北進の年紀対比表

はつくにしらす天皇 (崇神天皇)			懷良親王	
神武紀 による紀元	新・やまと物語 における紀元	備考	西暦	備考
前 667 (前 104)	(前 127)	会稽の東治を離れたか。 備 考	1336	比叡山を出発。
前 666 (前 103) 夏	丹敷浦 (荒坂津) 着。 備 考	備 考	1340 秋 (1339年末かともいう)	伊予の忽那島を出発。
前 665 (前 102)			1342	5月、薩摩半島最南端の「薩摩の津」(山川港) 着。
前 664 (前 101)			1343	
5 年 前 663 (前 100)			1344	
前 662 (前 99)			5 年 1345	
前 661 (前 98)	北進開始か。		1346	
1 年 前 660 (前 97)	1月、橿原宮で即位。 (崇神天皇即位)		1347 末	薩摩から北進を開始。八代着。
			1 年 1348	1月2日、宇土津着。置く。

649

5,928^r - 2/2

水1巻の
 末の667年
 東遷開始

1309 第1巻概の『日本書紀』年表参照
 660 1579 660年 補注 3-18 前 660年 辛酉年即位

(注) 由 5928^r - 2/2 に同表

H9.8.30(土)
H6.7.18(日)⑥
→

大分886
オヨ
5.929P

鹿児島県史 83P

H1.11.20(日)⑥
地名辞 961P

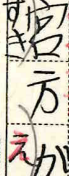
にわか
俄 元1709P

見鳥島の歴史 原口虎雄、山川出版社、八三頁参照)

・なお、谷山の福元に「御所ノ原」という所
があつて、征西将軍懷良親王の旧蹟と称され
てゐる。しかし、これは俄には信じ難いという。

(「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版
へ谷山参照)

■ともあれ、征西将軍懷良親王が薩摩
半島南部地域を居処とされてから以後、南九

州一帯では、俄然、方が優勢になつた。
■谷山城は、南の揖宿・頼娃・知覧氏、北の

矢上・伊集院氏、西の鯨島氏などによつて囲
繞され、―――――さらに、諸族の来

居する者があとをたたず、日向・大隅の肝付
野辺・楡井頼仲、遠く肥後の菊池・阿蘇氏

とも脈絡を通じた。「鹿児島県の歴史」原

口虎雄、山川出版社、八三頁参照)

■懷良親王の軍と、島津貞久の軍とは、谷山
の波平および牛下で激突した。しかし島津貞

久は、苦戦の末、退いた。もつともその後、
両軍対峙し、局地的戦闘が続いてゐた。

⑤5929° 29.648 昭和40年

⑤649° 同文 船出は ⑤5920° 6分 正年 1347年
⑤5928° 1342年 5
⑤162° 同文 菊池氏3代 179° 182° 5.930°
181°

幸俊がいた。
名和氏の居処

⑤5934° 19分

正平二年（一三四七）正月、いらい谷山城に
集結し、つづつあった宮方は、六月六日、海上が
らの熊野水軍の応援と称し、つづつ、渋谷一族
が拠つてゐた東福寺城を攻めた。十九日、三
カ国の軍勢を結集し、島津貞久軍は、宮方と
大いに戦つたが敗退した。（「鹿児島県の歴
史」原口虎雄、山川出版社、八三―四頁参
照）

懷良親王は、薩摩に居住すること五年、正
平二年（一三四七）十一月末に谷山を出発、
山川港から乗船、薩摩半島の西海岸を北上し
ハ代に上陸、宇土半島を迂回して住吉の津
に着き、翌正平三年正月二日に宇土港へ着いた。
宇土は、緑川の河口港で、鎌倉時代は北条
得宗領であつたが、この時は菊池一族宇土
道光のいた所である。（「菊池氏三代」杉本
尚雄、吉川弘文館、一八一頁参照）
宇土のすぐ北方の川尻には、北朝方の河尻

→ H 6. 7. 19 (水) ⑤

能本厚の丁史 105² 2714
① 1243² ⑤ 5930² 1190²

5. 931²

→ 41. 11. 21 (水) ⑤

⑤ 650²

菊池武光 ⑤ 1243²
同文、能本厚の丁史 105²
⑤ 5917² ⑤ 5930²

1348 朝 13 年 月
1336 9 月 1 日 能本厚の丁史 105²
菊池氏三代 182²

正月十四日、宇土を出発した懷良親王は、御船
において阿蘇惟時・惟澄らと会合し、所領に關
する要望をお聞きになり、二十日ごろ菊池に到着され
た。
菊池の隈郡山城（今の隈府城山）
へはいり、そこに征西府をおいたのはその年
の四月のことだった。それは実に、懷良親
王が比叡山を出発して以来十三年目にあたる。
（「能本厚の歴史」森田誠一、山川出版社、
一〇五頁。「菊池氏三代」杉本尚雄、吉川弘
文館、一七九―一八六頁参照）
このようにして懷良親王は、南北朝時代の
正平二年（一三四七）の暮に薩摩から八代
へと上陸し、翌正平三年（一
三四八）四月、菊池郡隈府に征西府を置き、
これ以後約十年間（正平十四年の筑後川の
戦いの前迄）、菊池を拠点とされた（第 61
表、懷良親王の生涯）坂井藤雄、葦書房、一
六七頁参照）
あるいは懷良親王は、大倭国の歴史の発端

⑤ 648²
20 行
阿蘇のものがたり 11 頁 5 行

⑦70¹/₂ - 3/6 - 1/12 あら
相良殿
あいらさず

5.932^P

⑦5917^P

1336 8
1329 1
7 7

1348 20
1329 1
19 19
⑦5917^P

⑦650^P

⑦5940^P 来へ

うかやふきあふの草は、大陽半島の五平山上陵に
五平山上陵

米

を再現して、
目指し、ハ代に上陸、その後、宇土・御船
を、経て、菊池へ入られたのかも知れない。第
七章へ戦い敗れて南へ下るの項参照
・なお、懐良親王（一三二九）一三八三は
正平三年（一三四八）四月菊池に征西府を置
かれた時、すでに二十歳となっておられた。

H 29 (2017) 12.7 (木) ~ 12.10 (日)
令和元 (2019) 11.28 (木) ~ 11.30 (4回)

1/30 17 1/29

5,933^p

菊池氏三代197⁰

2004326

高師直 日本史

15² 194

改訂

5873^p

改訂

地名辞 769^p (楠木正行)

菊池氏三代 196^p 徳長・生屋 109^p
日本史辞 282^p 徳大寺 255^p

参照

池代三代、杉本尚雄、吉川弘文館、一九六頁
日本史辞典、東京創元社、へ楠木正行、等

米

ところ、河内、四條、で、幕府、方の、大軍と戦つ
た楠木正行は、戦利あらず、いに弟正時と刺
し、ちがえて討死。吉野の行宮は、高師直の軍
によつて炎上。後村上天皇は、紀伊へのが
れ、宮方は、意気沮喪してしまつた。という。(「菊

改行

菊池A3A198

5,934

高師直 師直

菊池A3A199

日本史年157

武家方の分裂

足利尊氏と、同母弟直義とは、室町幕府草

創期の執政者として知られている。

尊氏の庶長子である直冬は、父にうとんせ

られ、子のない直義の養子になった。直冬

は、実父尊氏よりも養父と親密であった。

政治の実権を掌握していたのは、尊氏個人の

執事高師直であったが、直義と対立していた。

こうして、尊氏・師直、対直義

直冬、の対抗関係が生まれた。

正平四年の夏、政権を握った直義は、直冬

を中国探題に任じて備後（広島県）へ西下させた。

そんな時、師直が急に兵を集めて直義を攻め

さらに直冬をも襲った。直冬は九州へのかみ

た。

直冬は、肥後権守川尻幸俊に迎えられ、九

月中旬川尻に上陸した。川尻は、肥後国府と

宇土の中間、緑川に臨む川港だった。直冬は

河川

港町

川は、だいたい内陸部になぞり

毒殺

5937
5945
毒殺

コクヨ ケー20 20X20 5930 1619

宇土は、緑川の川口港

川尻には北朝方の河尻由5930 2019

599

徳政一生涯 1111
たす 小太 206 太中 3
援け 437
改訂

九州探題 74558
新大 34 98.199
徳政一生涯 110
126-生 109 5.935

改訂

⑤ 593/597-79 新大 三代 198-9

ちやう 1453
徴す まる
召す 呼び出す

⑤ 5957
-1/2
894
板光 は 新日本製鉄 近頃

幕府の命令により下向したと言いふらゝ、
九州諸国から兵を徴集しようとしたが
そこで九州には、恩賞権と軍事権をもつ三
つの政治核心が出来た。
① 正平三年四月、南朝の後村上天皇の弟懐良
親王が征西大將軍宮として肥後国菊池の隈部
山城へお入りになり、ここに征西府が置かれた
② 今また一年半後の正平四年九月、武家の棟
梁である足利將軍の子直冬が肥後国川尻に来
着いた。直冬は、九州北部の失着の豪族であ
る少武頼尚と手を組んで北進政策をとり、博
多の九州探題一色範氏を攻撃することになる。
③ そして九州統轄の為、幕府の出先機関
である九州探題の一色範氏、
の三つの中核である。
武家方が二分されたことにより、宮方の
立場は有利となった。
一色範氏は、宮方に援けを求めた。懐良親
王は、ようやくやゝ肥後を出て筑後へ入り、筑後
国府（久留米市合川町）に陣し、直冬の軍と

せんようせん 云1267⁸ 小戦国 懐古...生涯111↑

おあまら
義詮 華氏の三男

あみん
%分 2166P

1352.11
5934 349.9

5935 5.937P
5935 32 5935

あ 5934 69
直冬 3代 202P
111P 5945P 同又

とたへ
5冊組の原文
余端元/606

種ゆへの神じん格かくを後ご村むら上天てん皇みかどに奉たてまつった。
大百拜し朝日通信社、二五八頁。「太平記」
(四)新朝日本古典集成、四一八頁参照)
*
正平七年(一三五二)二月、直義は鎌倉に
おいて毒殺された。
その途端、九州の直冬の声望は地に落ちた。
一色軍に追われ、直冬は、大宰府原山城を
のかれ、中国の大内氏を頼って傷心のうちに
九州を去った。周防
この時、正平七年十一月、直冬の九州滞留
は、三年二ヶ月にすぎなかった。
直冬の九州退散によって、情勢はまた一変した。
今度、少武が宮方に降った。一方、先に宮
方と同盟を結んで戦ったはずの一色は孤立し
てしまった。
菊池武澄を将とする宮方軍は、懐良親王を
奉じて博多に入り、一色範氏を追放した。
少武は宮方の助力によって宿敵一色に打ち勝つこ
とができ、その宿願を果たした。それは、正平

H9.8.31 (月)
H6.7.23 (土) 酉

H30(2018)12.2(日)~

下 12/3

5,938^P

ミ 1 け 6
族 466^P
火 (土) 323^P
ミ 6 け 6
背 1316^P

も 5935^P 119^P

十年（一三五五）十月のことであつた。
[四] そして、少武が、懷良親王に

「以後背くまいき事」

という誓書を提出したのもこの時のことであつた。

尚、この誓書がのちの筑後川の合戦の際、ル

式の不信をなげるとして、菊池軍の遺憾

の火に結ばれ、氣勢を上げさせることにな

る。「懷良親王の生涯」坂井藤雄、葦書房

一〇九—一頁。「菊池氏三代」杉本尚雄

吉川弘文館、一九七二—二頁参照

*

たびたび
度々 1393

「さて」 5920
5980

1966
菊池邵英 377 5,939

1966
菊池邵英 377 5,939

H9.8.31 (四)
H6.7.20 (六) 5944

同反
5944-1/2
未読

大御門・小御門

■ これまで度々、

へ遙かな昔神功皇后の御代に、
なり天都城が、肥後国合志原の台地上に築か

れたのであろう。

と述べてきた。

そして、あるいは

へその都の宮城の西壁は、合志郡野々島あ

たりを、南北に走っていたのではなからうか

と想像される。

さて、――西合志村大字野々島字鳥

栖に、大御門、小御門と呼ばれる御所

の間があった、という伝説がある。

■ 菊池郡誌に名著出版、三七二頁、三七七

頁に、次のように述べられている。

第五章 伝説

昭和四十八年二月二十三日発行

九、大御門・小御門

西合志村鳥栖にあり。或は曰く、一時菊池

氏、將軍宮を奉じ此所に御所を構へ、若宮

御誕生の宴と別々に御所を唱へしものなら

H9.8.31(日)
H6.7.21(木)④
→ ④5928P 5932

よう ち ち 329P
おす ち 2271P 重立つ 主である
天っま 改訂 5,940P

征西将軍
5926

1字アキ

人かといふ。
と記されている。
●将軍宮とは、口征西将軍宮に、つまり懷良親王のことである。
■かし、この戦乱にあげられた南北朝の時、代々攻めるにも守るにも有利と思えない。合志の広大な大平原の真只中に、――一体、どうしたわけで御所を作ったのだろうか。
●普通に考える時、理解しがたいに思われる。
■だが、この物語では、
●東かつて神功皇后は、代に――この地に邪馬台国の中心としてのを置かれた。●これになら、――懷良親王は、この合志に御所を置き、九州鎮定の本営とされた。
と考えてみる。南朝の懷良親王および重臣達は、極秘とされていた日本史の真の歴史について知っており、その故事にならい、
①興国三年(一三四二)五月一日、まず薩摩

ひらけ 平城 1902 P

5931 P

5.941 P

491ル 5926 P
5932 P

5935 P 下

5932 P
5930 P

650 P 表

5928 P 表

半島最南端の山川港に到着され、
②薩摩に居住すること五年、正平二年（一三
四七）末に薩摩から太陽を背にして北進し、
八代に上陸され、
③翌正平三年（一三四八）四月、菊池の隈部
山城に征西府を置かれ、
④その後、宮方に有利な展開となったとき、
合志の地に御所を置き、九州鎮定の本営とさ
れた、
という次第なのであろう、と想察される。（第
七章へ戦い敗れて南へ下る。第十九十七章へ太陽
を背にして✓の項参照）
＊
それは、合志の地に宮方の御所が置かれ
たのは、何時のことだったのだろうか。
それは分からないが、合志あたりの攻防につ
いて、みてみよう。
正平三年（一三四八）四月、菊池に征西府
を置いた当時は、宮方にとりて多難な時であ
った。この頃、合志に平城（平地に築いた城）
を作った御所とした、とは考えにくい。

あつ 云々44^P

能本県のアタ 103^P
安国寺(利生塔)迄

能本県のアタ 114^P
5942^P ①-2/3

街く 148^P

5934^P 5935^P 4^P

5931^P 左
5934^P 左

思われる。

(一三四九)

正平四年九月、足利直冬が少式頼尚ととも肥後へ進攻してきたとき、合志幸隆は菊池代の背後を衝いて、その本拠を占領した。そして一時は、菊池郡を支配下に置いたのだった。(能本県の歴史に森田誠一、山川出版社、一一四頁参照)

5957-2/2

安国寺と利生塔を建てることを進言した。この安国寺・利生塔は、一面、戦死者供養で民心を慰撫するものであつたが、他方、北朝勢力の拠点として政治的にも軍事的にも大きな意味があつた。

安国寺はすべて新築したというわけではなく、旧寺をそれに充てた場合も多かつた。

→ H1.10.28日 熊本県史114
5,943P

●肥後国の安国寺も、合志郡久米荘（泗水村）
久米の寿勝寺をそれにあてたものである。
●尚、合志郡泗水村は、菊池の本拠隈府から
れることわがかにハキの地点で、懐良親王
や菊池氏にとって、大きな脅威であつたろう
と思われる。（「熊本県の歴史」森田誠一、
山川出版社、一〇三〜一〇四頁参照）
●とはいえ、翌年の正平五年（一三五〇）三月、合
志氏は阿蘇惟澄によつて大打撃を受け、その
後辛うじて合志郡の一角に命脈を保つてい
たとりう。（「熊本県の歴史」森田誠一、
山川出版社、一一四頁参照）
■とすれば、合志に宮方の御所が置かれたの
は、正平五年三月以降なとたなのだろうと
思われるが、詳らかでない。

*

そうせい 名
の 早世 1290 (早逝でる)

OK 5939 同文

5,944^P-1/2 改行

149^P 改行

149^P 136^P

ものならんか
構へ 一時菊池氏 將軍宮を奉じ此所に御所を
門小御門にありて西合志村鳥栖に日大御
四九頁参照
へ 懷良親王の生涯に坂井藤雄、葦書房、一
るのだから、子があつたらうと思わ
に包まれており、懷良親王の子孫に
「懷良親王の生涯」に坂井藤雄、葦書房、一
石は大円寺の資料館に保存されてゐる。この碑
は六年後の年号がかすかに読みとれる。この碑
供養塔として建てられたもので、親王薨去か
に地蔵尊があつて、これは懷良親王の妃の
たところ銘が出た。これは懷良親王の妃の
武重の娘であつたことか文献に見られる。
太平洋戦争の前、懷良親王薨去の地と
されてゐる福岡県八女郡星野村の大円寺境内
に地蔵尊があつて、これは懷良親王の妃の
に地蔵尊があつて、これは懷良親王の妃の
供養塔として建てられたもので、親王薨去か
は六年後の年号がかすかに読みとれる。この碑
石は大円寺の資料館に保存されてゐる。この碑

$$5,944^P - \frac{Z}{Z}$$

といひ伝えられてゐるといふのだから、
 恐らく、徳良親王に男の子が有つたのだらう。
 しかし早世されたのか、それとも何も語り継
 がれていないだけのことなのか、詳細いこと
 は分らない。